

早稲田大学 人間科学学術院 人間科学会 諸費用補助成果報告書（Web 公開用）

申請者（ふりがな）	杉田 創 （ すぎた そう ）
所属・資格（※学生は課程・学年を記載。卒業生・修了生は卒業・修了年月も記載）	修士課程 2 年
発表年月 または事業開催年月	2025 年 8 月
発表学会・大会 または事業名・開催場所	Association for Behaviour Analysis Australia 10th Annual Conference
発表者（※学会発表の場合のみ記載、共同発表者の氏名も記載すること）	So Sugita, Bryan Roche, Tomu Ohtsuki
発表題目（※学会発表の場合のみ記載）	Effect of Differential Matching-to-Sample Training on Competing Transfers of Approach/Avoidance Discriminative Functions
発表の概要と成果（抄録を公開している URL がある場合、「概要・成果」を記載した上で、URL を末尾に記してください。また、抄録 PDF は別途ご提出ください。なお、抄録 PDF は Web 上には公開されません。）	
近年、新たな認知理論として関係フレーム理論（Relational Frame Theory; RFT） が提唱されている（Hayes et al., 2001）。RFT は、人間の言語と認知の核心を刺激間の任意な関係づけにあると捉える理論である。本理論は、様々な精神疾患の維持メカニズムを説明する上でその有用性が示唆されてきた。例えば、パニック症の患者が電車内で発作を経験した場合、電車は回避を喚起する弁別刺激として機能しうる。臨床的には、この患者が電車のみならず、バスや自動車といった他の交通機関まで回避するようになる現象がしばしば観察される。これは、これらの刺激が「交通機関」という関係フレームによって電車と相互に関係づけられ、電車が有していた回避機能が他の刺激へと転移するために生じると考えられる。このように、ある刺激の心理的機能が、関係づけられた他の刺激へと波及する現象は刺激機能の転移と呼ばれる。 これまで、刺激機能の転移は回避行動の文脈をはじめ、多様な心理的機能を用いて実証されてきた（Dymond & Roche, 2009）。しかし、接近と回避のような競合する機能の転移が生じる状況において、いずれの機能が優勢となるかを決定する制御要因を検討した研究はほとんどない。この制御要因を解明することは、臨床場面において不適応的な回避行動を低減し、より適応的な接近行動を促進するための介入法の開発に寄与すると期待される。 そこで本研究では、PC を用いた見本合わせ課題により 2 つの刺激クラスを形成した。その際、各クラス内の一部の中核的な刺激関係に対し、他の刺激関係の 2 倍の訓練を実施することで、刺激関係の強度を操作した。その後、オペラント条件づけ手続きを用いて、一方のクラスには接近機能を、もう一方のクラスには回避機能を付与した。 実験の結果、接近機能と回避機能の転移が競合する刺激に対しては、より多くの訓練を経た刺激関係（関係強度の強いクラス） を通じた機能の転移が、より高確率で生じることが示された。様々な専門家とディスカッションを行い、今後の研究活動における参考となった。	